
予感

ホチ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
予感

【コード】
N0186I

【作者名】
ホチ

【あらすじ】
嫌な予感は始めからしていた。京子に喫茶店に呼ばれたそのときから

嫌な予感は始めからしていた。

京子と付き合った当初から待ち合わせにずっと使い続けていた二人にとって特別の喫茶店に呼ばれ、その当たって欲しくなかった予感、そこに座る京子の顔を見て確信に変わらざるをえなかった。
・・・振られるな。

「あのさ・・・」

京子の言いずらそうな表情。口がもごもご動いている。

「待つて、なんとなくわかった。それで・・・何で？」

「・・・ほかに好きな人が出来たの」

うわっ、よくあるパターンだけどいざ自分がその立場になるとキツイ。すでに背中嫌な汗でびっしょりだ。

変わる事なく注文していたアイスコーヒーをすすり、一気にまくし立てた。

「相手誰」

「いつから」

「もうだめか？」

「俺のどこが駄目だったの？」

「直すから」

「本当にもう無理？」

「頼むよ」

カツコ悪い。潔くない。声も震えだしてきた。

京子は質問一つひとつに対して丁寧に答えてくれた。その一つひとつが京子の中に自分の居場所がもうどこにもないことを痛いくらいに理解させる。

兆候はあった。一月ほど前からメールのやりとりは減り、電話ももちろん減った。デート？何それ、おいしいの？・・・お泊まりなんて言わずもがな、だ。

それでもその時は「倦怠期というやつか」と勝手に自分を納得させ行動を起こさなかった。もし何かサプライズでも用意していれば京子の気持ちは離れなかったのだろうか。全ては今更。京子に訊るはずがない。京子と話している間、後悔は絶え間なく続いた。

たとえ別れることに全然まったく納得していないとしても、京子の気持ちを今ここで変えられそうになかった。いつのまに溝はここまで深まってしまったのだろうか。不承不承にうなづき店を出た。しかし、京子との関係が戻ることはできないだろうと心の何処かが呟いていた。

家に帰る頃には悲しみよりも怒りの方が勝っていた。冷蔵庫の酒を片っ端から空け、完全に出来上がった頃思い出した。マズイ、泣き上戸だった。

怒りの次にはまたしても悲しみが涙と共に嵐のようにやてきた。一人暮らしをいいことに思い切り声を上げて泣いた。カッコ悪いな想像する男の理想像にはほど遠い。

涙と一緒に京子との思い出も溢れてきた。

告白・・・京子からのメールだった。自分からしようと思っていたのに、不本意。

初めてのデート・・・水族館。

初めてのキス・・・これも不本意。居酒屋の帰り、酔った勢い。

初めての夜・・・こちらの家。ついに卒業した。

ほとんど覚えている。ちくしょう、「ずっと大好きだよ」って言うてくれたくせに。涙が溢れてくる、止まらない。

突然ドンドンと叩く音に一瞬ドキリとしたが、単なるお隣さんからの苦情だった。京子が追いかけてきたわけじゃない。これをきっかけに涙と鼻水は止まったが、すでに新品のティッシュは半分ほど

減ってしまった。おまけにゴミ箱にはことごとく外れていた。一方的に別れを切り出されるのがこれほど堪えるとは思いもなかった。というか自分がそうなるとは夢にも見なかった。キツイ。

どん底にいるというのに腹が減った。さらに食後は眠くまでなってしまった。呆れはしたが、失恋程度では身体はどうかうなるものではないらしい。ガツカリしたが、安心もした。

この頃には京子への復縁の思いは「ヨリを戻したいって泣きついてきても遅いからな」と負け惜しみのような意地になっていた（これ以上傷つきたくない自分を護るため強引に変えたのかもしれない）。

京子が笑っている。ーあぁ、夢だ。

夢の中で夢と解るのは初めての体験だった。

振った相手の夢の中にその日のうちに現れるなんて図々しい奴だ。しかも満面の笑みで。

この笑顔が違う男に向けられるなんて……。まあいい。今は、この夢の中では京子の笑顔は自分だけに向けられているのだから。

そう思ってしまった夢の自分に腹が立ちつつ、これは引きずる、消耗戦になりそうだ。と、寝起きの頭ながらひしひしと感じていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0186i/>

予感

2010年11月4日02時34分発行